

日本学術振興会日中韓フォーサイト事業
事後評価（平成26（2014）年度採択課題）書面評価結果

日本側拠点機関名 東京大学大学院数理科学研究科（教授・山本 昌宏）
研究交流課題名 応用逆問題のモデル化とその数値計算

評価結果（総合的評価）

- | | | |
|----------------------------------|---|-----------------------------------|
| <input type="radio"/> | A | 想定以上の成果をあげており、当初の目標は達成された。 |
| <input checked="" type="radio"/> | B | 想定どおりの成果をあげており、当初の目標は達成された。 |
| <input type="radio"/> | C | ある程度成果があがり、当初の目標もある程度達成された。 |
| <input type="radio"/> | D | 成果が十分にありとは言えず、当初の目標はほとんど達成されなかった。 |

所見

プロジェクトの課題・内容は、日本が研究のイニシアティブをとり、かつ世界的な社会貢献ができるものである。活動成果は国際共著論文を含む数多くの論文として発表されており、特筆すべき非整数階微分を用いた放射能汚染に関する共同成果もあり、国際的研究拠点の基礎が構築できたと考える。一方、成果の情報発信を旧態依然として論文に頼っている。プロジェクトのHP（ホームページ）は東大の数理科学研究科のトップページにリンクが貼られておらず、HPに研究成果の報告も見られない。

日本側拠点は逆問題の拠点として既に認知されているが、本事業を通じて3か国の様々な研究者同士の交流によりさらに強固なものになったことが業績や取り組みから見てとれる。特に、若手研究者育成のため、産学協同のスタディグループを組織して積極的に活用したことは素晴らしい。しかしながら、日本の若手研究者は多いが、中国・韓国の若手研究者の参加が少ないように思えるのが残念である。

本事業を経て、産業界との連携を継続しつつ学術的価値の高い研究成果を生み出し、厚みのある研究拠点として今後さらに発展していくことが期待される。